

あんげろす

キリスト教研究所と私、そしてアジア

徐正敏

私は 2025 年 3 月末で明治学院大学を退職します。明治学院大学への着任から始まった研究所との関係は、決して私の明学での生活と別に考えられないものでした。長い間、所員、主任、所長として研究所に所属していました。私は韓国と日本を行き来して勉強し、教えました。結局、私の専門領域である宗教や歴史のテーマは、私の実存的な生活の根幹である東アジアに集中せざるを得ませんでした。したがって、私はキリスト教研究所の最も重要な研究テーマの一つは、アジアのキリスト教とアジアの神学の研究であろうと思いました。

全体キリスト教の歴史において、真のキリスト教自体は実際に存在しませんでした。それは常にパレスチナのキリスト教、ローマのキリスト教、ドゥーツのキリスト教、米国のキリスト教、韓国、中国、そして日本のキリスト教として存在してきました。言い換えれば、歴史に存在したキリスト教は、その具体的な文脈から切り離して考えることはできないと考えられます。

明学キリスト教研究所は日本とアジアに拠点を置いています。だからこそ、このアジアのテーマと視点からキリスト教を読み、考えるべき絶対的な理由になります。

2017 年には、キリスト教研究所内に 1 年コースの「アジア神学セミナー」が開講されました。それから 3 年後の 2020 年には「アジアキリスト教講座」と改編し、現在に至ります。アジアとキリスト教に関連がある専門分野の研究者や学生から、このテーマに関心のある一般の人々に広げるという目標が定められ、現在まで実施されてきました。

私は、アジアにおけるキリスト教は、キリスト教研究所の研究活動、その成果の普及、教育機能における重要なテーマの一つとして、今後も確立されていくと考えています。

そ・じょんみん（所員）

第 95 号

2024 年 12 月



賀川豊彦学会 お礼とご報告

岩田三枝子

2022年に、それまで長く賀川豊彦学会事務局長を務めてくださった永野洋茂先生より、事務局長の働きを引き継ぎました。キリスト教研究所には、毎年賀川豊彦学会大会の共催となっていて支えていただいています。また賀川豊彦学会の大会は毎年夏～秋頃に、多くはキリスト教研究所を会場として行われてきました。ここにおいても、キリスト教研究所からの多大なご配慮をいただき、感謝いたします。この場をお借りして、賀川豊彦学会より御礼を申し上げます。また、この今回の機会に、賀川豊彦学会の様子をご報告させていただきます。

賀川豊彦学会は1983年に設立され、これまで研究者に限らず、賀川豊彦に関心を持つ牧師や会社員等、実践家の方々にも広く門戸を開いてきました。現在、日本国内を始めとして、韓国や中国にも会員は広がり、80名ほどの学会員となっています。年に一度の大会開催と研究成果をまとめた学会誌の発行、また会員相互の交流を目的とした年に数回のニュースレター発行などを行っています。賀川豊彦学会大会の会場はほぼ毎年、賀川もかつて在籍した明治学院大学を会場として開催してきましたが、コロナ禍にはオンラインにて開催、そしてその後は韓国、関西にて、さらに今年は徳島にて開催しました。

2022年度韓国大会は大邱（テグ）大学および大邱サイバー大学との共同企画開催でした。大邱大学の会場とオンラインで繋ぎ、日韓両言語によって合同研究発表を行いました。大邱大学の創設に中心的役割を果たした李永植（イ・ヨンシク）牧師は、賀川と同じ神戸の神学校の卒業生でした。石部公男前会長をはじめ4名が当学会から渡韓し、大邱大学の皆様からの温かい歓待をいただきました。（写真は、大会での石部前会長の挨拶の様子です）



2023年度関西大会では、1日目は関西学院大学にて基調講演・研究発表を行い、2日目は、賀川のスラム活動開始の地である神戸の賀川記念館を会場としました。現在の賀川記念館の地域での取り組みについての講演の後、賀川ウォークとして賀川の活動跡地を歩いて巡りました。（写真は、神戸の地に建てられた賀川豊彦生誕100年記念碑前での記念撮影です）



そして今年度2024年度大会は、学会初の徳島での開催でした。徳島は、賀川が少年時代を過ごし、10代の頃に初めてキリスト教に出会った土地で、現在は鳴門市賀川豊彦記念館が設立されています。1日目は鳴門市賀川豊彦記念館にて基調講演・研究発表を行い、2日目には賀川ゆかりの地を貸切バスで巡りました。鳴門市賀川豊彦記念館は、賀川の活動であった農民福音学校発祥の建物である船本牧舎を模した味わい深い建物ですが、今回、そのオリジナルの船本牧舎も訪れることができました。（写真は、今も当時の姿のまま残されている船本牧舎です）



賀川家墓所、今は草むらとなっている賀川家跡、賀川が四書五経を学んだ正因禅寺にも訪れました。さらに、賀川のマネージャー役となり賀川と共に全国への伝道旅行を行った黒田四郎氏と関わりの深い日本キリスト教団石井教会や、眉山頂上付近にある賀川のベストセラー小説『死線を越えて』の石碑も訪れました。徳島の旬の魚「ぼうぜ」を昼食でいただいた後は『死線を越えて』に登場する通町を歩き、賀川が宣教師と出会いキリスト教信仰を持った通町教会跡地等を巡るなど、少年時代と青年時代の賀川に思いを馳せる盛りだくさんの充実したワークショップとなりました。また今大会では、徳島新聞と朝日新聞に取材いただいたことも、良い記念になりました。

来年 2025 年度大会は会場を再びキリスト教研究所に戻して 9 月 6 日に開催する予定で、キリスト教研究所には大変お世話になります。また、ご関心のある皆様、賀川豊彦学会へ歓迎いたします。

いわた・みえこ（協力研究員）

本のはなし

吉田忍

特にモノにこだわりがあるわけではないし、物欲がそこまであるわけでもない。

とすると、吉田の部屋はさぞ片付いているのではないか、すっからかんでないか、と思われるかもしれないが、あにはからんや、そんなことはないのであって、それもこれも本のせいである。新しい本を読みたくなることはあるし、好きな作家のものであればなんとかして入手したいと思うし、気になる本はしばしば出版されるし、手元に置いておかねばならない本というものはどうしてもあるし、というわけで、吉田の部屋の中は本が跋扈している。

高校まではお小遣いが少なかったこともあり、そこまで本が増えることもなかった。尤も、母の影響で読み始めた北杜夫の文庫本——単行本は高校生には高価であった——だけは少しずつ増えて部屋の小さな本棚の段を一つ占めるまでになった。大学学部生時代も本がそこまで増えるとい

うことはまだなかった。仕送りの中で自由に使える分はたいていが肝臓を潤すために消えていったからである。それでも、18 切符を使つての貧乏旅行の途中に立ち寄った町の本屋でたまたま発見して購入したトーマス・マン『ファウストゥス博士』（当時は岩波文庫版が無かったので、新潮社のハードカバー版。当時の自分にとってはそれなりのお値段だったので、貧乏旅行がさらに貧乏旅行となった）や、何日か分のバイト代全てを費やした、やはりトーマス・マンの『ヨセフとその兄弟』全 3 巻（筑摩社のハードカバーのもので、3 冊で 24000 円くらいのお値段。ちなみに、これは未だに文庫化されていない）などによって部屋の中に本が着実に存在感を増していったのはこの時期である。その後、大学院進学のために上京すると学部時代よりも本への物理的なアクセスが容易になり（学部時代を過ごした弘前には大書店の数は少なかったのである）、結果、気になる本との出会いが多くなり、お財布の中にある数枚の紙でもって数多の紙を束ねたものを購うという、「紙幣」という概念がない人が見たら不思議不思議と思うであろう機会が格段に増した。大学院は結局満期退学となったのだけれども、その後、非正規雇用者、つまり非常勤講師として口に糊するためにも、自分の研究のためにも、キリスト教、とりわけパウロ関連書籍を購入して手元においておく必要がいや増しに増した。そのような本は大変に高価であるのはしょうがないにしても、大変に分厚いので本棚のスペースを大いに必要とするものたちばかりで（たとえば、IVP Academic が出版した *Dictionary of Paul and His Letters* なる書籍は大層分厚く、そのためにちょっとした筋トレにも凶器にも使える。おまけに、旧版と新版の二冊が手元にある）、かくして、いつの頃からかついに本は書架に収まらず、床の上に積まれることになった。もはや部屋は自分のために借りているのか本のために借りているのかわからなくなってきたのであった。

それならば電子書籍を購入すればよいではないか、電子書籍であれば何冊購入してもスペースをとることはなく、お部屋は広々なままであるぞよ、と言いたい方もいるであろう。しかし、どうも電子書籍は私の性に合わない。旧い

人間なのかもしれないが、こればかりはしょうがない。だって電子書籍は自分のモノとなった感覚がしないのだから。そうは言っても本が部屋に物理的に収まらなくなりつつあり、しかしより広い部屋を借りるお金は全くなし、といった状況にあった頃、明治学院大学に採用していただくことになり（2024 年 4 月着任）、自分の研究室が与えられ——本が一冊も入っていない空っぽの書架が、しかも天井にまで届くそれが研究室の左右の壁に端から端まであるのを見た時の私の嬉しさ、これをどのように語れば良いのか知らん。

よしだ・しのぶ（所員）

雑録

田中祐介

最近ふとした瞬間に、「心が通う」という言葉は素敵だなと思った。

誰しも、歳を重ね、経験を積み、責任が大きくなれば、負けないために強くあろうとする。そのように容易に折れない強い心は頼もしいが、人間は心の奥底まで強くあることはできない。強い心の鎧に包まれた内面の深奥には、打たれやすく、孤独で、救いを求める弱い心が常にある。

強い心の鎧を過信して縦横無尽に活動し、弱い心を置き去りにすれば、いつしか自己の弱さを忘れ、深奥からの叫びも聞こえなくなるであろう。やがて悲鳴と化した叫びにより鎧の内側から腐食が始まり、やっと気づいた時には取り返しのつかない事態を迎える。そのようなことは考えるだけでも恐ろしい。

そうならないためには、常に自己の弱さを認め、向きあうことが必要であろう。そして身近な他者に、その弱さを知ってもらうことが安心に繋がるであろう。我が身を顧みて、家族や親しい友に自分の弱い心を見せているか、強い心の内奥に弱さを隠したままで日々を過ごしていないかと自問する。

少しの勇気をもって自分の心を開き、弱さを他者に伝

えれば、他者もまた安心して心を開きやすくなるであろう。互いの弱さを認め、語り、寄り添いながら真摯にむきあう。そうすることで心と心は浸透し、安心した状態でいられる。それこそが「心が通う」ことになるのであろう。

弱い心はどうしても弱い心である。しかし心を通わせることで他者の痛みを実感し、その痛みを和らげようと働きかけるとき、弱い心は小さく燃え、能動的に他者のために活動を始める。そのようなことを通じて、もし他者の不安が安心へと変わり、絶望が希望へと転じるならば、弱い心とはなんと強く、凜として見えることであろうか。

今年も主任として、クリスマスカードの聖句を考える時期を迎えた。変わらず平和とは程遠い世界情勢は、いわば国家規模に肥大した強い心と強い心がぶつかりあい、そのたびに無数の弱い人間の弱い心が打ちのめされる事態である。憔悴しきった弱い心が文字通り安心し、再び前を向けることを願いながら、今年の聖句はコリントの信徒への手紙二のパウロの言葉から選んだ。

誇る必要があるなら、私の弱さを誇りましょう。（コリントの信徒への手紙二/ 11 章 30 節）

先立つ 29 節で「誰かが弱っているのに、私も弱らずにいられるでしょうか。誰かがつまずいているのに、私が心を痛めずにいられるでしょうか」と述べた後に続く一節である。弱った他者に寄り添い、つまずいた時に自分も心を痛める。そのようにできるのも、心を通わせようとするからこそであろう。この聖句を胸に抱きながら、自己の、身近な他者の、そして世界中の弱い心を想像して祈る。そのようにして今年のクリスマスを過ごし、新年を迎えたい。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究活動（2024 年 7 月～2024 年 11 月）

キリスト教研究所 1 日研究会

開催日時：2024 年 7 月 27 日（土）14：00～17：15

開催場所：白金校地 本館 9 階 92 会議室

対面参加を基本とするオンライン参加（Zoom）の併用

発表① 棚木憲一郎 研究所客員研究員

発表：フィヒテ『ドイツ国民への講話』刊行を終えて——
語れたこと、語れなかったこと——

コメント：稲垣久和 研究所協力研究員

発表② 吉田忍 研究所所員

発表：パウロの義認論

コメント：永野茂洋 研究所協力研究員

2024年度アジアキリスト教講座（秋学期）

開催日時：各回火曜日 18：40～20：10

開催場所：白金校地 3号館1階 3203教室

第11回 10/1 「潜伏キリシタンとは何か」

講師：倉田夏樹（立教大学日本学研究所研究員、研究所協力研究員）

第12回 10/8 「天皇制とキリスト教」

講師：吉岡拓（明治学院大学准教授、研究所所員）

第13回 10/15 「近代日本におけるキリスト教の土着化をめぐって」

講師：久保田浩（明治学院大学教授、研究所所員）

第14回 10/22 「カンボジア紛争の歴史とキリスト教」

講師：宇井志緒利（明治学院大学非常勤講師、立教大学専任講師、研究所協力研究員）

第15回 10/29 「キリスト教の人類学」

講師：池田昭光（明治学院大学助教、研究所所員）

第16回 11/5 「近代日本の児童文学とキリスト教」

講師：柿本真代（京都華頂大学准教授、研究所協力研究員）

第17回 11/12 「旧制高等学校におけるキリスト教主義
学生寮の文化」

講師：田中祐介（明治学院大学専任講師、研究所所員）

第18回 11/19 「近代朝鮮に見る米国北長老派の宣教と政治」

講師：李省展（恵泉女学園大学名誉教授、キリスト教研究所協力研究員）

第19回 11/26 「ドイツ人宣教師エミール・シラー博士
の日本での働き」

講師：國津信一（明治学院大学非常勤講師、研究所協力研究員）

第20回 12/3 「アジアキリスト教の出会いの歴史と課題」

講師：徐正敏（明治学院大学教授、研究所所員）

第36回賀川豊彦学会大会

開催日程：2024年9月13日（金）～14日（土）

1日目：賀川豊彦学会・総会

2日目：ワークショップ（賀川豊彦ゆかりの地めぐり）

中国近現代キリスト教研究プロジェクト主催研究会

開催日時：2024年9月21日（土）19：00～ Zoom開催

報告者：宮坂弥生

「日本伝道のゆりかごー東南アジアのミッション・プレス」

国際公開講演会

開催日時：2024年10月17日（木）13：30～17：00

開催場所：白金校地 本館9階 92会議室

講演1「韓国朝鮮戦争とカトリックローマ教皇庁の反応を中心に」

講師：崔起栄氏（韓国西江大学名誉教授）

講演2「韓国朝鮮戦争とプロテスタントー世界教会協議会（WCC）の対応を中心に」

講師：金興洙氏（韓国牧園大学名誉教授）

通訳・解説：李省展（国際日本文化研究センター客員教授、研究所協力研究員）

新着図書

- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2024。
- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2024。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2024。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2024。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2024。
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版、2024。

あんげろす AΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第95号

2024年12月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL: 03-5421-5210 / FAX: 03-5421-5214
Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩